

特別史跡

一乗谷朝倉氏遺跡40

平成21年度発掘調査・環境整備事業概報

福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館



第130次発掘調査区全景（空撮）



第130次発掘調査出土遺物（ガラス玉と溶解ガラス片）

特別史跡

一乗谷朝倉氏遺跡40

平成21年度発掘調査・環境整備事業概報

福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館

序 文

当資料館は、平成21年度事業（「中期第3次10カ年計画」の5年次目）を終了し、その成果を「特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡40 ～平成21年度発掘調査・環境整備事業概報～」として刊行いたします。

発掘調査は、第129次調査（朝倉館跡庭園修理に伴う事前調査・福井市事業）・第130次調査（計画調査、門ノ内地係）・第131次調査（現状変更調査、庄角地係）を実施し、面積合計は2,592m²でした。第129次調査につきましては、「紀要2009」でその概要を報告しています。第130次調査では、土塁で区画された大きな屋敷で2間×5間の礎石建物（SB6375）を検出しました。山側には水甕と見られる7個の越前焼水甕が並び、反対側には炉を設け、靴の羽口、ガラス小玉90点、熔解したガラス66点、原材料の鉛14点、石英3点、水晶4点などが出土し、この工房で秘匿の秘技とされるガラス玉を製作していたことが分かりました。従来、一乗城下町の機能は当主や一族の館、武家屋敷、社寺、医師の屋敷、小規模建物の町屋などに分類されてきました。今回の事例は、鉄砲鍛冶、刀鍛冶（未発見）、諏訪館跡直下で発見された金工師などの職種の屋敷と同じく「戦国大名朝倉氏お抱えの頭領（直屬して秘術の最先端技術を使いこなす職人集団を統率する）屋敷」として、新しく分類できそうです。一乗城下町の実態解明にとって重要な発見になりました。

環境整備事業は、第112～114次発掘調査地を対象として八地谷川護岸修景整備工事を実施しました。現在、八地谷川（SD5073）は道路（SS5090）遺構を侵食して川幅の広い自然の川として機能していますが、当時は幅約0.9m×道路面からの深さ約1.2mの人工の石組み溝だったことが発掘調査で分かりました。整備するにあたってはその点に留意して慎重に施工しました。

一乗谷朝倉氏遺跡は、国の特別史跡、庭園は特別名勝、出土品は重要文化財の指定を受けた重要な遺跡です。今後、国民の文化遺産としてより良好な状態で後世に伝えていくことがこれからの重要な課題といえるでしょう。そして、朝倉氏遺跡研究協議会をはじめ、一乗谷朝倉氏遺跡活用推進協議会、朝倉氏遺跡保存協会等々いろいろな分野の方々から、あたたかい、時には厳しいご指導をいただいております。今後も、文化庁、福井県、福井市、地元住民と充分連絡を取りあって、山積しているさまざまな問題を速やかに解決していきたいと考えております。ご指導、ご確鑿のほど、よろしく願いたします。

平成23年2月

福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館
館長 水野和雄

例 言

1. 本書は、福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館が平成21年度に実施した国庫補助事業による発掘調査及び環境整備事業の概要報告書である。
2. 本年度は、「発掘調査・環境整備事業中期第3次10ヵ年計画（新10ヵ年計画）」の5年次にあたる。本書は、第130次・第131次発掘調査の成果、八地谷川護岸の環境整備の概要について収録した。
3. 本書の作成にあたっては、調査担当者が各項目を執筆し、項目末に文責を記した。
4. 遺構番号の頭に付した略記号は以下のとおりである。
SA：土塁（土塀・柵）、SB：建物（礎石・掘立柱など）、SD：溝・濠、SE：井戸、
SF：石積施設、SG：池・庭、SI：門、SK：土塙（柱穴・埋塞等）、SS：道路（通路）、
SV：石垣、SZ：暗渠、SX：その他

目 次

1. 平成21年度の事業概要	3
2. 第130次発掘調査	6
遺構	6
遺物	15
3. 第131次発掘調査	19
遺構	19
遺物	21
4. 環境整備	22
第1図 平成21年度発掘調査・環境整備位置図	
第2図 第130次発掘調査位置図	
第3図 環境整備位置図	
第4図 第130次発掘調査遺構全体図	
第5図 SF6352・6353遺構詳細図	
第6図 SB6359遺構詳細図	
第7図 ガラス製遺物出土付近遺構詳細図	
第8図 第130次発掘調査出土遺物	
第9図 第130次発掘調査出土遺物(柱根)	
第10図 第131次発掘調査位置図	
第11図 第131次発掘調査第3グリット詳細図	
第12図 雲正寺地区と八地谷川	
第13図 八地谷川護岸修景整備工事平面図	
第14図 石積護岸工断面図	
第15図 舗装工断面図	
表1 平成21年度事業概要一覧	
表2 第130次発掘調査出土遺物一覧	
表3 第131次発掘調査遺物一覧	
写真図版 第130次発掘調査区遺構	PL.1～5
第130次発掘調査出土遺物	PL.6～7
第131次発掘調査区遺構・遺物	PL.8
環境整備	PL.9～10



第1図 平成21年度発掘調査・環境整備位置図

1. 平成21年度の事業概要（第1～3図）

特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡は福井市のやや南東に位置し、東西を一乗城山や御草山などに囲まれた谷地形にある。山地を含む約278.7haが特別史跡に指定されており、このうち約28haが福井市により公有地化されている。発掘調査事業及び環境整備事業は福井県が行っており、昭和42～61年は5ヵ年計画、昭和62年以降は10ヵ年計画をたて、これに基づいて事業を進めている。本年度は中期第3次10ヵ年計画の5年次目にあたる。

第130次発掘調査区の門ノ内地係は、遺跡の中心部を南から北へむかって流れる一乗谷川の右岸に面している。一乗谷川の上流と下流には城下町中心部へ入る城戸があり、それぞれ上城戸、下城戸とよばれるが、本地係は上城戸より城下町へ入って200mほどのところに位置する。さらに中心部へ300mほど進むと東側には朝倉義景の側室がいたとされる諏訪館跡があり、中心部には朝倉館跡がある。本調査区の南隣は平成20年度の第127次発掘調査区（上城戸地係）にあたり、ここでは大溝を確認している。また、平成19年度の第124次発掘調査区（米津地係）は諏訪館跡の山裾にあたり、刀装具の土製文様型を発見した。

第131次発掘調査区は個人宅の現状変更に伴う調査である。一乗谷朝倉氏遺跡内には朝倉館跡の北側に民家の密集する居住地区があり、本調査区もこの地区内にあたる。

環境整備事業を行った雲正寺地係は、一乗谷川の左岸側にあり、対岸は先ほど述べた居住地区が広がる。地形は真ん中を八地谷川が流れる扇状地である。平成13年度から平成17年度にかけて、八地谷川の兩岸を4地区に分けて発掘調査を行い、平成18年度より順次環境整備事業を行っている。4地区の平地については昨年度でほぼ終了した。本年度の環境整備対象地は、八地谷川を含む護岸である。平成14年度の第113次発掘調査では川沿いに道路跡を検出し、平成15年度の第114次発掘調査では、戦国時代の護岸の遺構の一部確認した。本整備事業はこれらの遺構を復元した。

（千木良礼子）

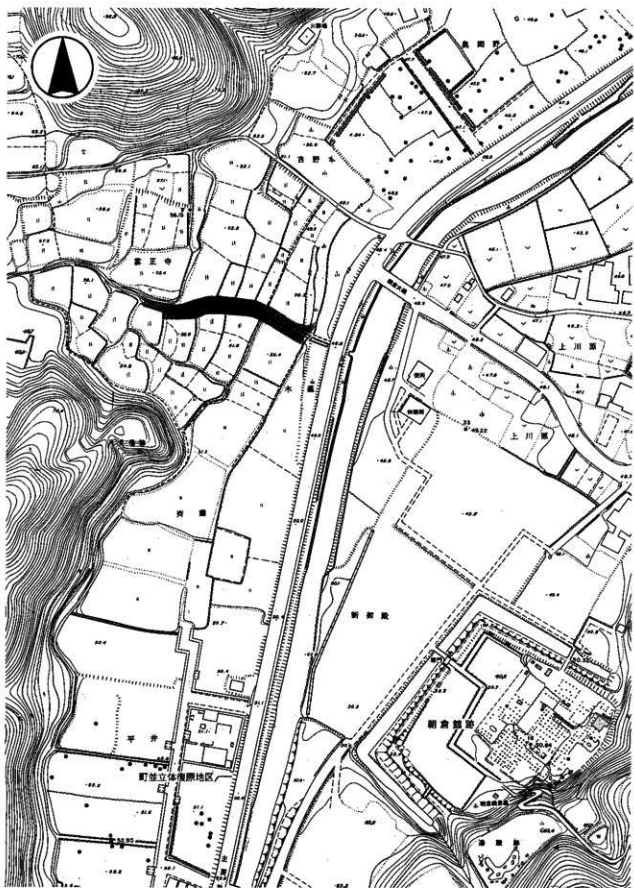
調査回数	調査箇所	調査期間	面積	調査事由
第129次	福井市城戸ノ内町字水谷	平成21年4月13日～平成21年4月30日（うち1週間）	約50㎡	修理に伴う調査（福井市事業）「紀要2009」に別記
第130次	福井市城戸ノ内町字門ノ内	平成21年4月22日～平成22年12月16日	約2,500㎡	中期第3次10ヵ年計画に基づく調査
第131次	福井市城戸ノ内町14-2	平成21年4月22日～平成21年5月16日	約42㎡	現状変更に伴う調査

工事名	環境整備箇所	整備期間	規模	整備事由
八地谷川護岸修景整備工事	福井市城戸ノ内町字雲正寺地	平成21年10月28日～平成22年3月11日	延長88m	中期第3次10ヵ年計画に基づく整備

表1 平成21年度事業概要一覧



第2図 第130次発掘調査位置図(S=1/2000)



第3図 環境整備位置図(S=1/2000)

2. 第130次発掘調査

平成19～21年度は一乗谷川右岸の米津～上城戸地帯間における遺構を明らかにし、遊歩道沿いの整備を進める目的で発掘調査を行っているが、平成21年度は第130次として、平成20年度の第127次調査区の北隣で調査を行った。なお第127次と第130次調査区は、南北約70mあり、土塁で囲まれた一つの大きな屋敷と考えられる。また第130次調査区の西端は一乗谷川によって浸食されているため、屋敷の西端部は確認できなかった。

調査の結果、耕作土下0.1m前後が昭和40年代の土地改良工事による削平を受けており、上層遺構面上にあったと思われる建物の礎石等は大半が失われるか原位置を留めていなかった。しかし、掘立柱建物の柱穴や、溝、石積施設など、地下に掘りこまれた遺構は比較的良好な状態で検出でき、さらに、掘立柱建物の柱根、杭、板などが、水分豊富な粘土質土壌によって良好な状態で保存されていた。また大型の石積施設で酒樽と考えられる遺構では、水を引き込む竹製の導水管が見つかったことが貴重な成果であった。さらに、山裾と土塁の交差する一角では、炉跡1基や焼土が広がっており、火熱を使った工房跡と考えられる建物跡を確認した。その南東部を中心に集中的にガラス玉や溶解ガラス片が出土し、室町時代としては例の少ないガラス工房跡を検出したことが特に重要な成果であった。平成19年度の第124次調査区(米津地帯)でも刀装具を製作する金属工房跡が発見されており、彌陀館跡から上城戸跡にかけての一乗谷川右岸には、こうした特殊な工房の集中した区域が存在した可能性が考えられるようになった。

遺構(第4～7図、PL.1～5)

SD6250 第127次で検出した石組み溝で、南端は暗渠をくぐり土塁外の大溝まで通じている。第130次調査区では約2mのびた地点で途切れ、全長約27mとなった。朝倉氏の滅亡した最終時期の遺構と考えられ、覆土に炭・焼土が多く混じり、多種類の陶磁器片が出土した。なお第130次調査区での最終時期の遺構(以下、上層遺構とする)は非常に少ない。

SB6251 第127次側で検出した建物の続きで、今回は建物の北東側で列状に並ぶ礎石を検出した。土台建て建物であり、建物の西辺はSD6250の東肩付近と考えられ推定約6.5m四方の規模で、上層遺構である。

SB6331 柱根を列状に検出した建物で、位置的に建物の北側の一部と考えられる。柱列は、耕作土を除去した地面で既に突出して見えはじめ、土地改良時に重機が引っかけたと考えられる斜めに横たわった柱もみられた。柱は一辺12～14cmの方形断面をした角柱で、建物の北辺では柱5本が、約1.3m間隔で約5.4mの長さで並んでいた。また北辺の南で検出した柱を合わせると9本であった。なお建物全体の基礎が掘立柱か礎石と掘立柱の併用なのかは不明で、平面精査をくり返し行った結果において他に柱穴は見つからなかった。

SX6332 扁平な石を並べた石敷遺構で、SB6331の柱根検出面の下層で検出した。石敷の西端のみ南北に揃った石列が並び、石敷の区切りとしている。東・北・南側の石敷の区切りは不明である。

SG6333 楕円状の石敷をもつ小さな池とみられる遺構である。長軸(東西)約2.5m、短軸(南北)約1.4mで、西端を頂部に卵型に近い。側石は高さ0.12~0.15mの小さな石を立てて掘えている。SD6337側付近には側石がなく、溝と直接つながっていたのではないかと考えられる。池の底面より0.1m上までは小砂利層が堆積していた。出土遺物は越前焼・土師質皿の細片のみであった。

SX6334 主に河原石を用いた集石遺構で、SD6337の溝内から溝の北側外縁部にかけて約2m四方に広がっていた。石敷遺構(SX6332)、池(SX6333)と関連した同時期の遺構とみられる。

SD6335・6336 検出面上では一つの溝であったが、下層でSD6335・6336の2つの溝に分かれ、切り合い関係からSD6365が古く、SD6336が新しかった。両溝の上層は、炭・焼土を含む厚さ約0.1mの層が堆積し、おそらく最終期の上層の溝の痕跡と考えられる。よってこのことから同じ場所付近で溝の改築が2回行われていると考えられた。最も古いSD6335の溝は壁面が垂直に落ちる断面箱形であった。

SD6337 南北の両壁が垂直に落ちる断面箱形の溝で、SD6335から垂直に分かれる。深さ約0.25~0.3mで、底面の幅は約0.3mである。溝の南側のみ上面に石を並べており、石の無い所では2段掘りになっていた。SG6333との接点では、SG6333の側石が溝上面の石も兼ねていた。

SD6338 SD6335・6337の分岐点より南側の断面箱形の溝である。SB6331北東角付近から南側では溝底が浅くなり遺構の輪郭が徐々に分からなくなったため、南方向の行方は不明である。

SK6339 隅丸方形の素掘り土坑で、壁面はほぼ垂直に落ちる。長軸(南北)約1.6m、短軸(東西)約1.1m、深さ約0.5mである。性格については不明。土師質皿片が少量出土したのみである。

SK6340 検出面上では楕円形をしていたが、大部分は隅丸方形をした素掘りの土坑である。その規模は長軸(東西)が約0.75m、短軸(南北)が約0.5mで、深さは約0.6mであった。粒子の細かい炭層が土と交互に堆積していた。出土遺物は土師質皿片のみであった。

SD6341 石組み溝で、幅は石組み法で約0.15~0.2mである。南から北に向かって下がり、南端は東に直角に折れてSX6334・SD6337とつながる。また北側の途中からは石組みが完全に抜き取られ、断面「U」字形を呈している。溝の南半部分では完形に近い土師質皿が廃棄された状態で多量に出土し、きわめて小さな灰釉の皿(第8図18)も出土している。

SD6342 暗渠と考えられる素掘りの溝で、断面箱型に掘削した中に約0.1~0.2m大の河原石を多く含む砂質土で埋め戻したような状態であった。東西から南北に直角に曲がり、その北端部はさらに西に曲がって、深くなりながらSD6348・6349の二股に分かれていた。

SX6343・6344 土師質皿が一括で埋められた径約0.25mの小さなピットで、深さは約0.2m

である。建物の角付近で地鎮として土師質瓦を埋納した可能性も考えられる。

SK6345 隅丸方形で、壁面がなだらかな素掘り土坑で、約2.5m四方、深さ約0.5mを測る。白色粘土がブロック状に湿じる特徴がみられ、遺物は土師質瓦片のみであった。

SD6346 深さ0.1～0.15mと浅く、やや不整形な溝である。溝を境に東側の地面がやや高く、また溝の東厨付近には土地改良時の影響で横転しているもの礎石らしき石が、溝に並行してみられた。

SD6347 幅約0.4m、深さ約0.4mの断面箱形の素掘り溝で、溝内の堆積土が周囲の土質とほとんど変わらないため掘削後すぐに埋めもどされたものと考えられる。

SD6350 幅約0.5～0.7mで長さ約0.7mを測る溝で、溝肩が整わないことや、土質に締まりがない点から、礎石の抜き取り痕などが考えられる溝である。

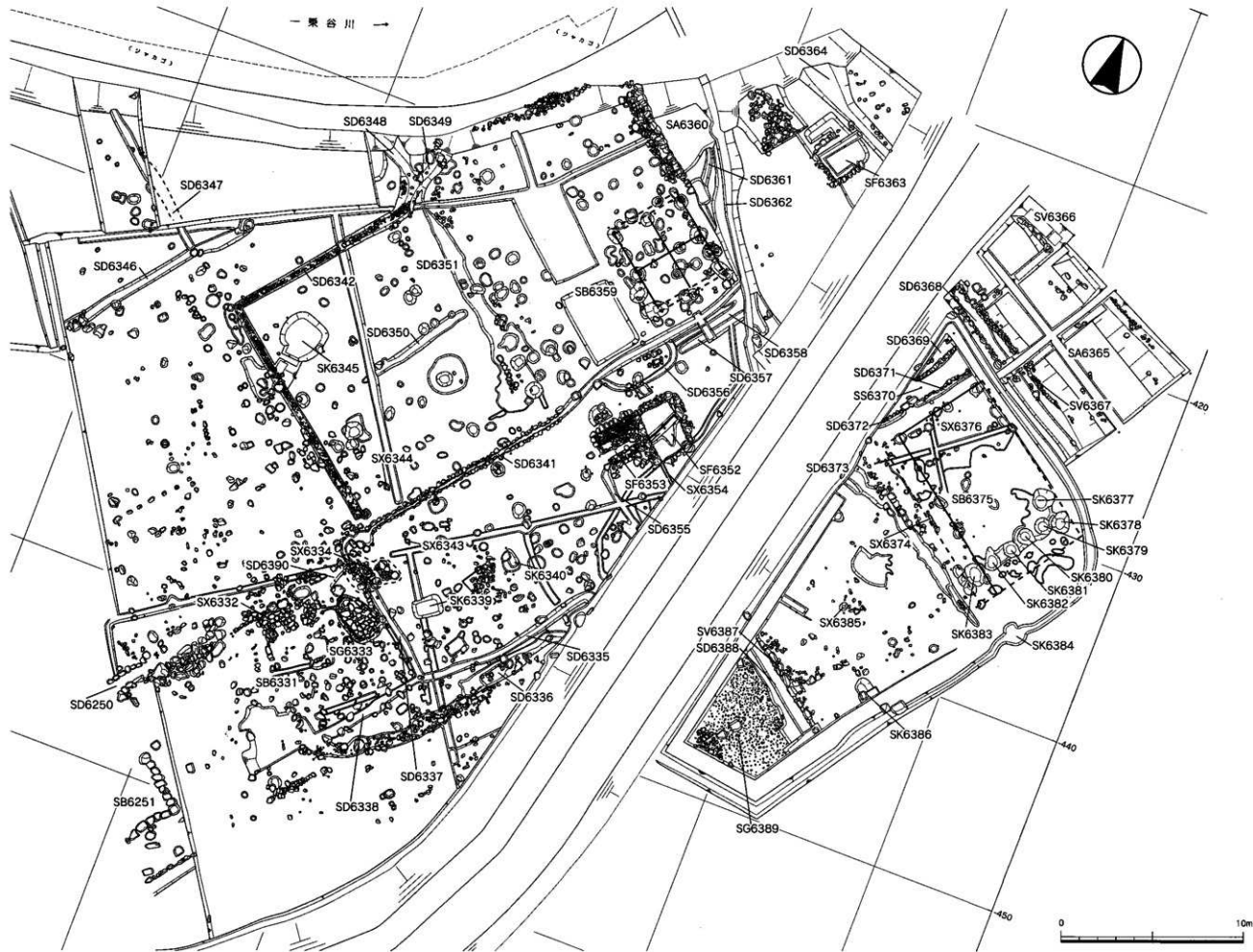
SD6351 最も新しい時期の遺構で黒灰色の炭・焼土を多く含む土が堆積した、深さ約0.1～0.15mの浅い溝である。

SF6352 方形の石積施設で、溜樹と考えられる(第5図)。東西約2.5m、南北約2.0m、深さ約1.0mで、比較的大型の規模である。最終時期まで存続した遺構と考えられるが、途中で大きな変化があり、当初築かれた時は、南側の方形石積施設(SF6353)と連結していたとみられるが、後にSF6353が埋められ、SF6352の単独となる。堆積土は大きく4層に分かれ、下のⅢ・Ⅳ層が溜樹内に堆積した粘質土層で、水平堆積をしている。そのⅢ層とⅣ層の境目から、南北壁面間の長さとはほぼ一致する板が3枚重なった状態で出土した。板の長さは約180cm、幅約30cm、厚さ約1.5cmで、3枚とも全く同じ大きさである。なお板の取り上げ作業は(株)吉田生物研究所に委託して行い、ウレタン等で全面を養生し慎重に行った。また板は樹種同定の結果、3枚ともクルミ属オニグルミであった。その他SF6352南東角上面では導水管と考えられる節を削り貫いた竹筒が、深さ0.07～0.08mの細い溝内(SX6354)より見つかった。

SF6353 SF6352とつながる方形の石積施設で、東西約1.9m、南北約2.4mを測る(第5図)。深さは、約0.5mが最深部であるが、一旦このレベルまで掘り込んだ上を石で隙間無く埋め戻し、深さ約0.3m上で床面を整えていた。遺構の性格については明確でないが、可能性として溜樹に付随した洗い場のものと考えられる。またSF6353南東角より東に向かって素掘りの溝(SD6355)を検出した。おそらく排水用の溝と考えられる。

SB6359 2間×2間の孤立柱建物である(第6図)。径約0.8～1.1mの柱穴内から、径0.12～0.15mの柱根や、柱を抜き取り痕として残った空洞や、柱の外側の樹皮が良好に保存されて検出され、柱の位置が明らかになる大きな成果が得られた。これらの柱の根元の位置から、東西が4.80m(北辺)～4.80m(南辺)、南北4.06mを測った。東西方向の建物幅が北辺と南辺で若干合わず、東西幅4.80～5.10mになる。ただ地上部分ではこの誤差は全く問題にならないであろう。建物の四隅で柱穴の壁に接するように柱を置いている点が興味深い。柱材は、樹皮を残した丸柱や、ホゾ穴が付いた再利用の角材1点などで、比較的粗雑なものが使われていた。おそらく簡素な作業小屋的な建物と考えられる。

SA6360 北面が石垣状に3段程度積まれた土塀跡である。西側は一乗谷川の浸食によって



第4図 第130次発掘調査遺構全体図(S=1/200)

失われ、東西約5.5m、高さ約0.45～0.6mを測った。

SD6362 断面「U」字形の溝であるが、もとはSD6341等とつながる石組み溝と考えられる。後世にも利用され何度も掘り起こされた状態がみられた。

SF6363 方形の石積施設で、東西約2.0m、南北は石積みの北辺が失われているため残存長で約1.8mを測り、深さは約0.3m下で床面となる浅いものである。また床面には粗めの砂を用いて固く締められた部分と赤色化して焼けた部分がみられた。何らかの火を扱う作業をした可能性が高いと考えられる。しかし遺物は土師質皿片を中心に少量で、特筆すべきものはみられなかった。

SA6365 屋敷北端の東西方向の土塁である。遡歩道西側では確認できなかった。土塁の斜面裾には石垣があり、北側の石垣(SV6366)と南側の石垣(SV6367)の間の幅で約5.6mを測り、高さは南側の平坦面から約1.6mを測った。

SD6368 土塁南側の裾にある溝で、東から西に下がる。溝の南側に上面が平らな石を並べたところが西側でみられる。幅は、石のないところで約0.7～0.8m、深さ約0.2～0.3mを測る。炭・焼土層を含み上層遺構と考えられる。鉄輪碗、染付花瓶、銅製紅皿、金箔片などが出土している。

SS6370 建物(SB6375)へ出入りする通路と考えられ、東側には溝(SD6371・6372)が、西側には溝(SD6369)がみられた。通路幅は約1.3～1.6mを測った。

SD6373 東から西に下る溝で、東端は徐々に狭まり途切れる。溝の両側に石組が残っているところが一部でみられ、石組みの内法幅で約0.2m、深さ約0.15～0.3mを測った。上層遺構で、元様式の染付大皿、青磁酒会壺、銅製環付金具・飾金具などの特筆すべき遺物が多く出土している。

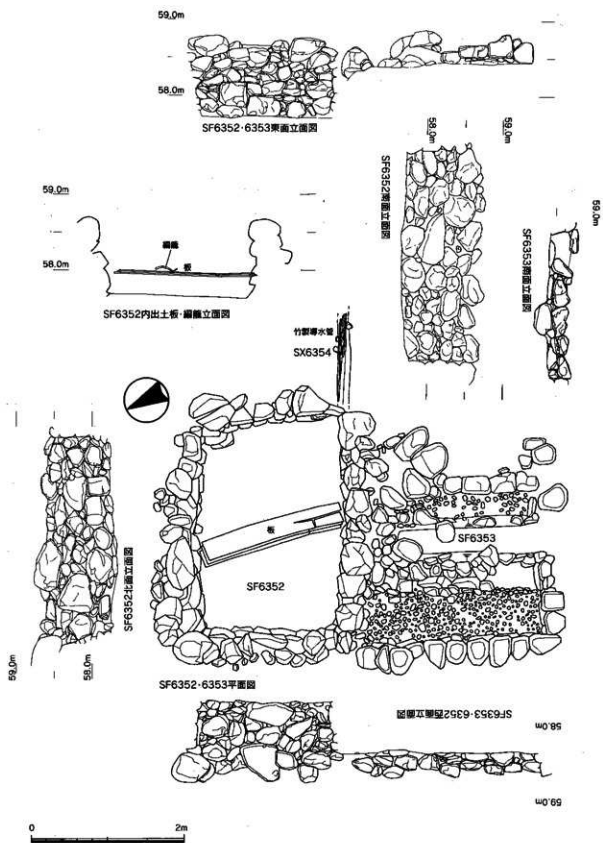
SB6375 ガラス工房跡と考えられる建物で、礎石を抜き取った痕とみられるピットの位置から南北2間(約5.5m)×東西5間(約10.0m)で、南側に1間(約1.0m)の庇をもつ礎石建物が想定された(第7図)。遺構面を検出した当初、建物内の中央から東寄りにかけて焼土粒を多く含む赤味を帯びた土が広がっていた。また、建物の西側で直径約0.5m、深さ約0.15mの炉跡(SX6376)が1基見つかり、鍛冶か金属工房跡の可能性が考えられたため、遺構面を精査した際の排土を洗浄して調べることとした。その結果、ガラス玉や溶解ガラス片が156点見つかり、建物の南東側で集中して出土することが分かった。その集中グリット(3×3m四方で調査時に任意で設定した遺物取り上げ用のマス)をみるとAC-9区が76点と最も多く、AC-9区とAD-9区にまたがるSK6383の覆土からの35点が続き、AC-10区の14点、AC-8区の11点、AD-10区の8点、AD-9区の4点、AD-8区の2点、AB-9区・AC-11区・AD-11区・AE-10区・AC-9区とAD-9区にまたがるピットから1点の出土であった。

SK6377～6384 越前焼の大甕を埋設していた土坑と考えられる。

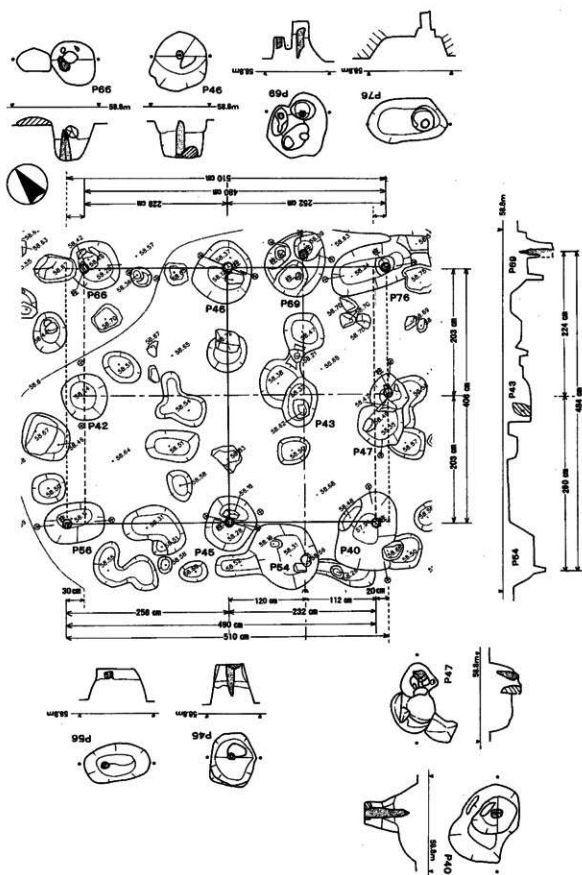
SX6385 越前焼の摺鉢を正位置で埋設した遺構である。

SD6388 北側に石垣(SV6387)をもつ溝で、南側は溜め池(SG6389)に直接続いていた。

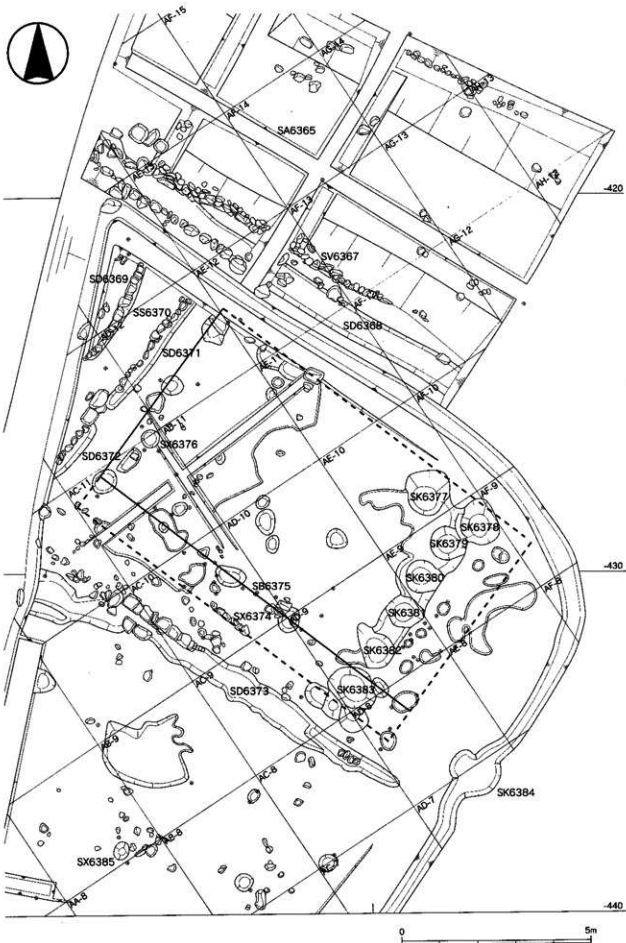
SG6389 溜め池と考えられる遺構で、床面に小さな石を敷き詰めていた。



第5圖 SF6352・6353遺構詳細圖(S=1/50)



第6図 SB6359遺構詳細図(S=1/60)



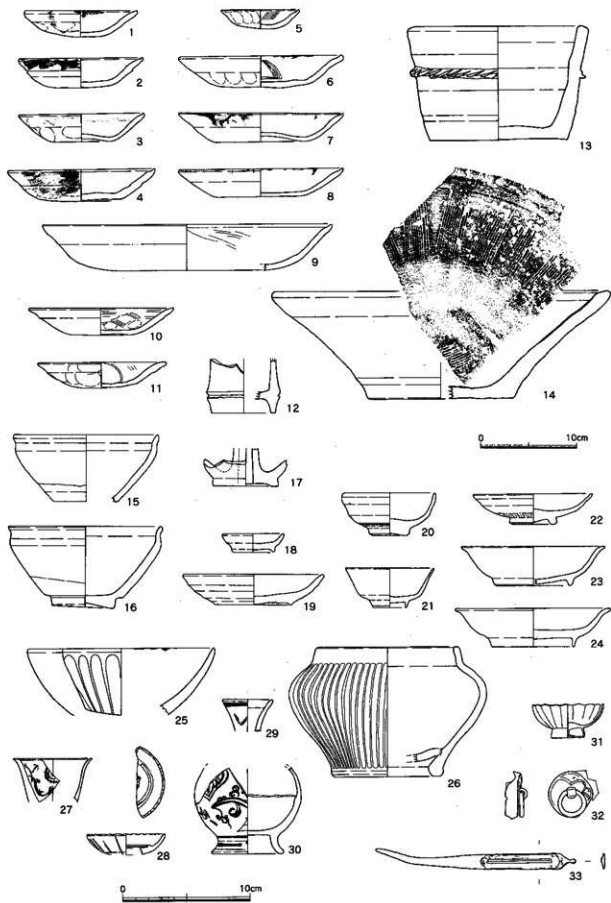
第7図 ガラス製遺物出土付近遺構詳細図(S=1/100)

遺物 (第8・9図、PL.6・7)

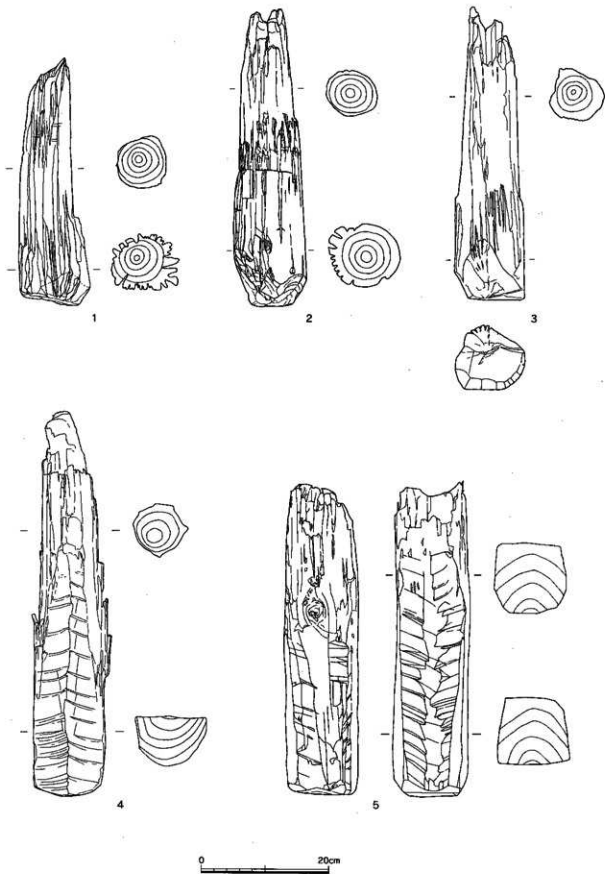
第130次発掘調査により出土した遺物の総点数は26,019点で、1㎡あたりの遺物密度で示すと10.41点/㎡となる。出土遺物の種類別の割合をみると、土師質皿が全体の81%と非常に多いのに対し、その他陶磁器類の出土量が少なかった。おそらく一乗谷の焼亡当

器種	点数	%	器種	点数	%	器種	点数	%		
縄文焼	壺	1,183	青磁	碗	120	金銀製品	釘	39		
	蓋	213		皿	68		金具	6		
	鉢	112		鉢	57		贈付金具	2		
	襷鉢	264		盤	47		小柄	2		
	桶	19		壺	5		輪尻	1		
	花生	2		酒念蓋	27		寶物	1		
	計	1,793		瓶	12		銀鏝	1		
	土師質	皿		21,087	香炉		2	鏝	1	
		瓦皿		2	その他		3	火箸	2	
		丸皿		3	計		341	紅皿	1	
土師		8	碗	16	キセル	1				
蓋		5	皿	669	銅鏡	84				
土師		4	疋	23	銅製品	8				
香炉		3	その他	8	釘	14				
不明	1	計	736	紅洋	97					
計	21,113	81.15	白磁	碗	113	その他	46			
鉄軸	碗	99		皿	119	小計	306	1.18		
	皿	3		坏	5	バンドコ	128			
	蓋	52		鉢	1	盤	16			
	茶入	1		盤	35	碗	40			
	計	155		蓋	3	磁石	18			
灰輪	碗	7		赤行	瓶	12	鉢	41		
	皿	29			計	288	臼	1		
	蓋	2			その他	青白磁壺	1	その他	91	
	鉢	41				壺	132	小計	334	1.28
	香炉	4	碗			4	漆碗	10		
	卸皿	4	皿			6	漆製品	12		
	燗台	1	計			143	曲物	10		
	不明	1	小計		1,508	ヘア	2			
	計	89	0.34		銅製	ソバ茶碗	4	箸	7	
	瓦質	風炉	26			皿	1	折敷	6	
香炉		7	鉢	1		丸床	1			
蓋		2	蓋	1		裏書板	1			
瓦燈		2	小計	12		0.05	櫛	2		
不明		8	輸入陶磁器合計	1,520	5.84	篋	1			
計	45	0.17	木製	櫛	1	櫛	1			
田楽他	土師器	1		土師器	1	竹材	17	その他	竹材	17
	須恵器	3		須恵器	3	板材	51		板材	51
	蓋	1		蓋	1	角材	5		角材	5
	備前焼	3		備前焼	3	柱礎	26		柱礎	26
	近世陶磁器	62		近世陶磁器	62	その他	166		その他	166
不明	4	不明		4	小計	318	1.22		小計	318
計	74	0.28		香	8	香	8		香	8
小計	23,269	89.43		土	24	土	24		土	24
				種子	33	種子	33		種子	33
			鷲羽口	10	鷲羽口	10	鷲羽口		10	
			駒石	1	駒石	1	駒石	1		
			鏡	1	鏡	1	鏡	1		
			布	1	布	1	布	1		
			福かご	1	福かご	1	福かご	1		
			ガラス玉等	156	ガラス玉等	156	ガラス玉等	156		
			薬師	3	薬師	3	薬師	3		
			水晶	4	水晶	4	水晶	4		
			石英	3	石英	3	石英	3		
			不明	27	不明	27	不明	27		
			小計	272	小計	272	小計	272		
			小計	26,019	小計	26,019	小計	26,019		

表2 第130次発掘調査出土遺物一覧



第8圖 第130次発掘調査出土遺物



第9図 第130次発掘調査出土遺物(柱根)

時の遺構面や遺物包含層が後世の削平によって失われたことが大きいことと、上級武家クラス以上の屋敷である可能性から土師質皿が宴会などで多く使われたためと考えられる。また土師質皿ではほぼ完形の資料が、甕樹(SF6362)、溝(SD6341)、小ピット(SX6343・6344)で地点・層位別に一括出土し、今後遺構の時期等を検討する上での貴重な資料となっている。土師質皿以外では、青磁酒会壺・壺や染付瓶・大皿など、輸入陶磁器の優品が、山樹側(遊歩道の東側調査区)の上層遺構(SD6368・6373、SK6383)より多く出土している。これらは当調査区の東側、斜面上方にある平坦面から転落してきたものではないかとみられ、諏訪館跡以南の小高い場所に、未確認の有力武将の屋敷跡が存在する可能性が高まった。

**ガラス工房跡
関連の遺物**

ガラス工房跡に関連した遺物では、ガラス玉、溶解ガラスなどのガラス製造物が156点や、原材料の可能性のある鉛や銅の溶解した塊、石英、水晶、さらに鑷の羽口、砥石、厚さが0.2mmの非常に細い芯状鉄器が出土している。しかし溶かした原材料を入れる坩堝・トリベなどは出土しなかった。ガラス玉は大きさ2.5～4.5mmで、色調は水色(淡青色不透明)、緑色(緑色透明)、紺色(濃青色)、白色(白色不透明)の4色であった。平成22年2月から国立文化財機構奈良文化財研究所と科学分析を共同で行っており、現在も分析中であるが、平成21年度中の成果として、ガラス玉はカリウム鉛ガラスで巻き付け法によって製作されたことが分かっている。

**その他の
主要な遺物**

主な出土遺物を第8図、柱根を第9図で示した。

土師質 (1～11)は皿である。(1～4)はSF6352のII層出土、(5～9)はSF6352のIV層出土で(5～7)は3枚重ねに一括出土し同時期である。(9)は口径22.5cmと非常に大きなものである。(10・11)はSX6344の小ピット出土で、口径11cm前後でタール痕はない。

越前焼 (12)は花生の底部とみられるもの、(13)は桶で口径17.0cm、器高12.0cmを測る。(14)は摺鉢でSF6352のIII層より出土した。

瀬戸美濃焼 (15・16)は鉄輪碗である。(17)は灰輪の燭台とみられるものである。(18・19)は灰輪皿である。(18)は口径4.9cmとかなり小さく、SD6341の南端付近から出土した。

白磁 (20・21)は坏、(22～24)は皿である。

青磁 (25)は碗である。(26)は酒会壺で、SD6373、SK6383とその付近より出土した。口径16.5cm、器高15.3cmを測る。

染付 (27)は坏、(28)は皿である。(29・30)は瓶と考えられるもので接合しない。(29)は遊歩道西側のSB6331付近で出土し、(30)は遊歩道の東西両側で広範囲に出土した。

金属製品 (31)は銅製の紅皿でSD6368出土、(32)は銅製の環付金具でSD6373出土した。(33)は銅製の斧で、SG6333の南側付近より出土した。長さ17.2cmを測る。

柱根 (1～3)はSB6359柱穴に伴う丸柱の柱根である。(1)は柱穴(P45)より検出し、残存高48.7cm、基部径13.5cmを測る。(2)は柱穴(P46)より検出し、残存高58.6cm、基部径13.8cmを測る。(3)は柱穴(P66)より検出し、残存高58.8cm、基部径13.7cmを測る。(4・5)はSB6331に伴う角柱の柱根で、(4)は残存高76.0cm、基部幅13.8cmを測り、(5)は残存高61.5cm、基部幅14.0cmを測る。 (藤部正典)

3. 第131次発掘調査（現状変更に伴う発掘調査）

本調査は個人宅離れ新築の現状変更に伴う発掘調査で、現況は畑(家庭菜園)およびコンクリート舗装の通路となっていた。平成2年度に、隣地の主家新築に伴う発掘調査(第71次)を行い、地表下約0.8mまでは県道のかさ上げ工事に伴う造成土があり、盛土下の旧水田耕作土下に近世の民家跡遺構面が広がり、地表下約1.8mで朝倉氏時代の遺物包含層があることを確認した。

本調査では、建物の新築基礎となる範囲と西隣の浄化槽設置予定範囲を対象地とし、3地点にグリットを設け、合計約42㎡の掘り下げ調査を行った。

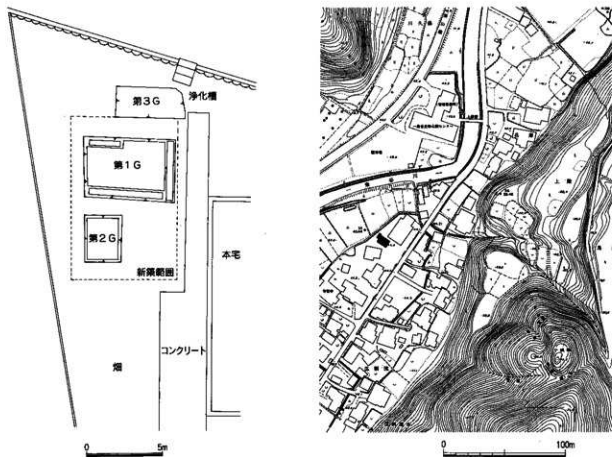
まず建物新築部分を先行して行うことにし、第1・2グリットを設けて基礎工事が遺構に影響を及ぼすかどうかを確認することを目的に調査を進めた。その結果、地表下約1mまでが現代の盛土であり、地表下0.6mまでを限度とする工事のため、遺構には影響が及ばないことを確認した。なお、この第1・2グリットでは遺物も出土していない。

次に浄化槽部分には第3グリットを4.5×2.1m範囲に設け、16世紀代の遺構面が検出されるまで掘り下げて調査を行った。その結果、地表下約1.5m付近で16世紀代の遺物包含層(6層:炭焼土)を検出し、朝倉氏時代の遺構とみられる石組井戸を1基検出した。またこの井戸よりもやや新しいとみられる6層上面で、石敷遺構を検出した。この石敷遺構を覆っている5層(レキ混粘質土)も近世の遺物が全くないため、朝倉氏の時代に含まれるか、あるいはこれに近いと考えられる。ただ、6層の炭焼土を多く混入した層が、一乗谷の焼亡した時期(1573年)にあたる想定すれば、朝倉氏滅亡直後の16世紀末の遺構である可能性が考えられる。しかし、6層では鉛滓の出土もことから、炭・焼土の発生源が火災直後の層とは限らず、鍛冶または何らかの火を扱う作業によるものという可能性もあるので、今回の狭い範囲の調査では正確には断定できない。

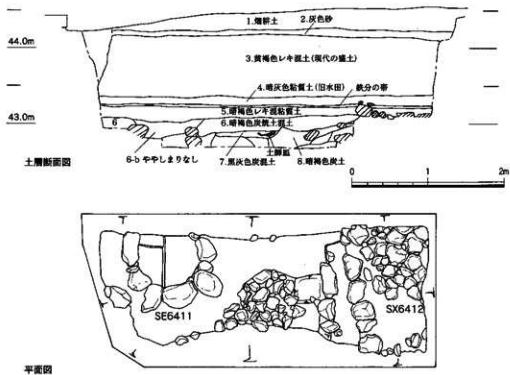
遺構 (第10・11図、PL.8)

SE6411 円形の石組井戸である。石組みの内法より直径約0.8mを測る。この石組天端面の検出高は標高約43.0～43.1mで、6層(暗褐色炭焼土混じり土)が全体を覆っていた中において検出された。井戸の構築面自体は6層の攪乱により残っていないとみられ、井戸内にも6層が入り込んでみられた。出土遺物については6層に含めて取り上げたが、目立ったものは見られなかった。井戸内の掘り下げは調査区壁面の崩落の危険性から、上から2石分の石組みまでを検出するとどめた。

SX6412 上面が平らな石を用いた石敷遺構である。石敷面の標高は約43.3mである。6層炭焼土層の上面に築かれていることが第一の特徴で、井戸(SE6411)より層位的に新しくなる。この遺構の全体が分からないので性格については不明である。石敷きの北端では列状に



第10図 第131次発掘調査位置図



第11図 第131次発掘調査第3グリット詳細図(S=1/50)

やや大きな石が並んでおり、0.1m低い位置に、少し間隔を置いて別の石列が並んでいるため、階段状施設になる様相がみられる。

遺物 (PL.8)

土師質皿が完形に近い状態で5個体分の出土がみられたのが主な遺物としてあげられる。この他は、細かな破片のみで特筆するものはない。この土師質皿はグリット東壁面に半分割された状態で出土し、出土した層はその部分のみ黒灰色の炭を多量に混入した土(7層)であった。土師質皿5点はタール痕がなく、灯明皿としての使用がなかったものである。大きさは口径18.0cmのものが1点と、口径13.0cm前後が4点で、D類タイプである。(柳部正典)

器種	点数					
	3~4層他	5層	5~6層	6層	合計	
越前焼	甕	7	5	4	1	17
	蓋	3	1	1		5
	播鉢	4	1	7	2	14
土師質	皿	45	50	36	60	191
	土釜	2	1			3
	不明		2			2
鉄輪			2	1	3	
灰輪	皿	2	3		5	
青磁	碗	1	2		3	
	皿	3			3	
白磁	皿	6	5	2	13	
	壺	1			1	
	坏	1	1		2	
染付	碗	3			3	
	皿	3	1		4	
近世陶磁器		42			42	
不明陶磁器		1		2	3	
瓦		1			1	
石製品	硯	1			1	
	バンドコ			1	1	
	砥石	1		1	2	
	その他	2	1		3	
金属製品	釘	1			1	
	鉄滓				1	
合計	130	73	54	67	324	

注) 本表(遺物取り上げ層番号)の6層は、第11図(土層断面図)の7層も含む。また3~4層他には、清掃中の出土遺物を含む。

表3 第131次発掘調査出土遺物一覧

4. 環境整備（第12図～15図、PL.9・10）

環境整備（一般）

本年度は、現在も川として機能している遺構を含む範囲の工事を行った。

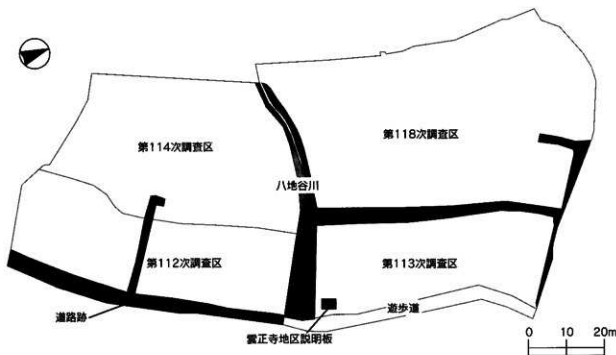
本工事で雲正寺地区の整備工事は概ね完了し、町並立体復原地区と平面復原地区を結ぶ地区一帯の広がり公開したことになる。本地区は八地谷川を挟み、第12図に示す4地区に分かれる。なお、4地区の整備内容は「特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡概観」37～39を参照いただきたい。また雲正寺地区は、八地谷の奥に進むにつれて高台になっており、そこから一乗谷川向いの朝倉館跡の唐門や、南陽寺跡などを見渡すことができる。

なお本年度は、福井県福井土木事務所との協力体制のもと工事を進めた。福井土木事務所が工事を発注し、当館が遺跡保護に関する監理を担当した。

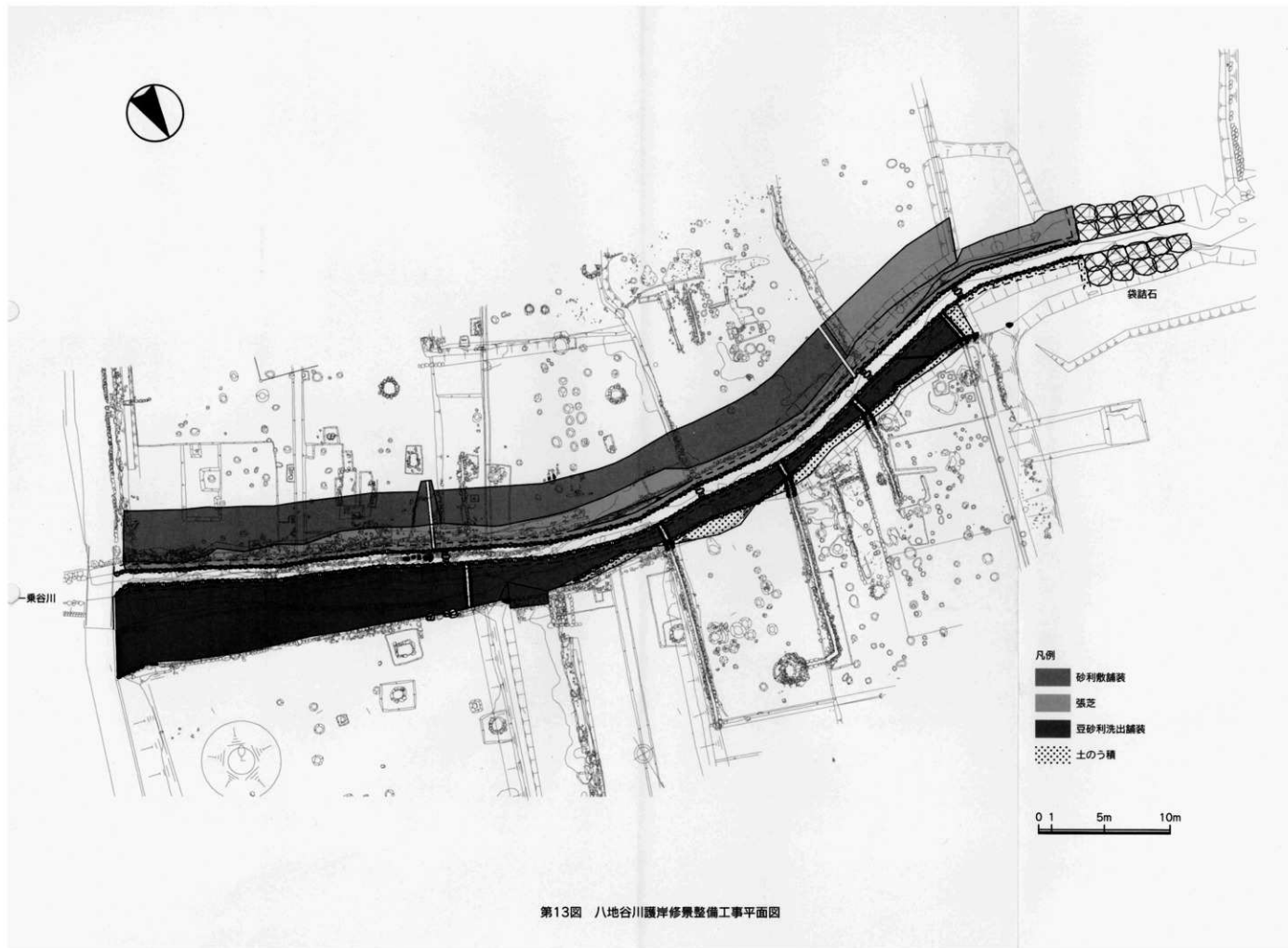
八地谷川護岸修景整備工事

平成15年度、第114次調査区（雲正寺地係）にて、石積みの護岸を発掘調査により確認した。しかし、平成16年度に福井豪雨に見舞われ、空積みで積まれていた護岸の一部が流された。現在も、川として機能している石積護岸の復元は他県に例がなく、平成20年度より福井県朝倉氏遺跡研究協議会にて設計を検討し、平成21年度に施工を行った。

本工事では遺構の保護を確実にを行うため、残存する遺構護岸や河床を吸出防止剤などで覆い、その上で新たに石積護岸などを復元した。なお、特に復元した護岸は、近年の集中豪雨にも耐える構造とする必要があったため、景観上は空積みのように見せ、構造上は練積みとする方法を採用した。以下は工事の概要である。



第12図 雲正寺地区と八地谷川



第13図 八地谷川護岸修景整備工事平面図

施工中は仮設の流路を設け、施工を進めた。仮設の流路として、4インチポンプとコルゲートパイプを使用した。

また仮設流路は南側に設け、そこから石などを運ぶ際には、0.1㎡バックホーを使用した。ただし、護岸工や河床工などで石を据える際は、基本的に人力での施工とした。

護岸石は、発掘調査で検出した石積護岸の復元を行った。まず、設計図面から計画河川センターラインを出し、このラインを基準に工事を進めた。次に人力にて床均しを行い、続いて土木安定シートを敷き、根石を設置した。

石材は発掘調査で出土した石のほか、遺跡外の石場にて選定を行った。選定では、自然石で亀裂などの欠点のないものを選定した。

護岸石を積む段階に頻繁な立会を行い、石質や色合い、空積みのように見えているかなどの点に極力配慮して確認を行い、場合によっては石材の変更を行った。また、石積護岸の裏側に裏込めコンクリートを施工する際は、自然石の直径約3分の1をコンクリートに埋め込み、また、石積みの隙間には後方から小さな石材を詰石として入れ、出来る限り表からコンクリートが見えない護岸の造成に配慮した。後には草やコケが生え、石積みも周囲に馴染むことが予想される。

なお最上流部は、袋詰石を使用して護岸をおさめた。

流水による遺構面の洗掘を防ぐため、石張りの河床を新設した。

石材にはφ400mm内外とφ250mm内外の2種類の自然石を使用し、自然的な景観に配慮して据え、厚さ200mmのコンクリートで固定した。さらに人工的なコンクリートが石の間から見えないう、自然石の間を砂～φ10mmの小石で敷き詰め、コテで押さえた。また、所々に落差を設け、河川らしい自然的な流れとした。

舗装工では道路跡を示す豆砂利洗出舗装と、第112次調査区整備地との取りつき部の砂利敷舗装を施工した。

豆砂利洗出舗装の石材は、φ5mm～25mmの天然骨材を使用した。

砂利敷舗装は、既整備地の様子から防草シートの効果が一定程度あると考えたため、防草シートを敷設した上に施工した。

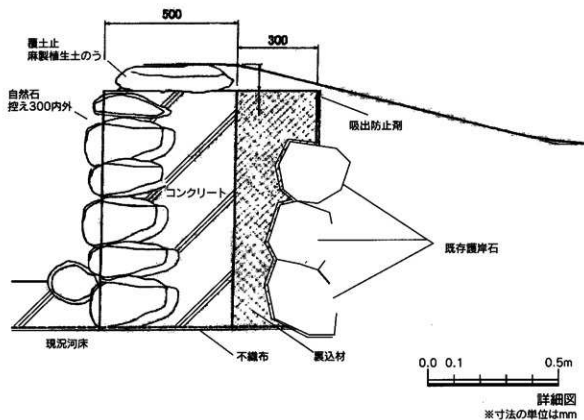
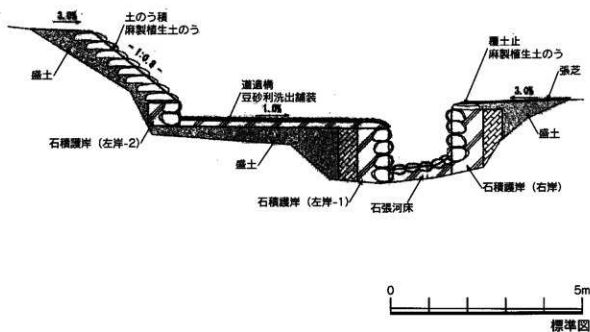
周辺の既整備地からの流路を延長して八地谷川へと排水するために、流路工を敷設した。

自然石を使用した流路の石材はφ350mm内外とし、底打ちは道路跡と同様の豆砂利洗出舗装とした。その他、既整備地でU字溝、皿型側溝を使用した流路は、同等の資材を使用して延長した。

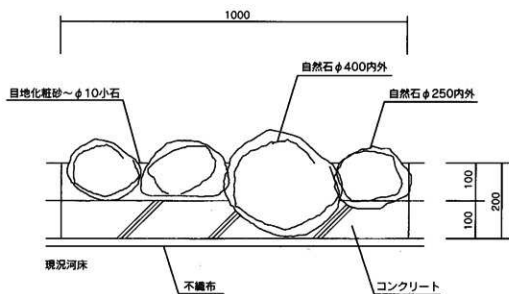
植栽工は、張芝工と植生土壌積み工を実施した。

張芝は在来種を使用し、植生土壌はヤシ繊維土壌を主に使用した。

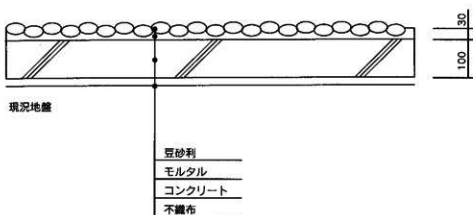
(藤田若菜)



第14図 石積護岸工断面図



河床工



道路舗装工
※寸法の単位はmm

第15図 舗装工断面図(S=1/10)



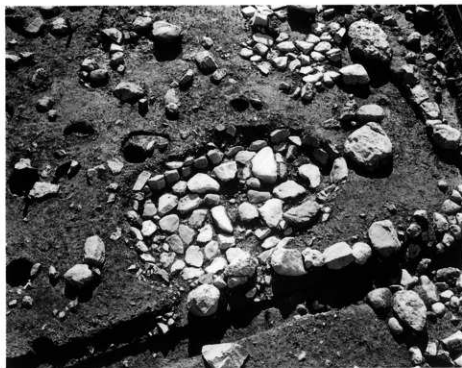
全景(南より)



遊歩道西側地区全景(北より)



SB6331の柱列(東より)



SG6333(北より)



SF6353・6352(南より)



SF6352内出土の板(北より)



SB6359(南より)



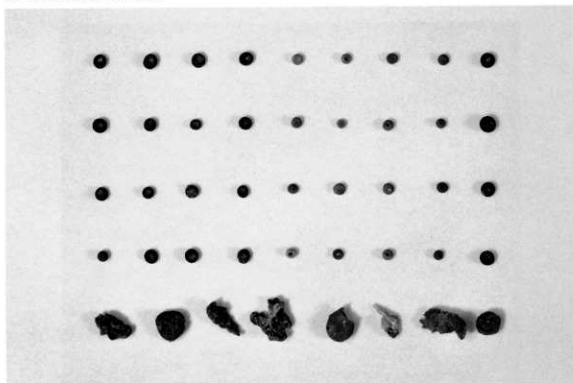
SB6359のP46柱根近景(南より)



遊歩道北側地区全景(南より)



ガラス製遺物出土地近景(南より)



ガラス製遺物(ガラス玉と溶解ガラス片)



石英、水晶、溶解した鉛・銅



柱根4側面



柱根5側面



柱根4底面[第9図]



柱根5底面[第9図]



調査地全景(東より)



第3グリット遺構全景(北より)



第3グリット東壁土層堆積状況近景(北西より)



第3グリット出土土師質皿



八地谷川護岸修景整備工事全景(東より)



八地谷川護岸修景整備工事全景(西より)



護岸工(西より)



道路跡(東より)

報 告 書 抄 録

ふりがな	とくべつしせきいちじょうだにあさくらしいせき
書名	特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡40
副書名	平成21年度発掘調査・環境整備事業概報
シリーズ番	40
編集者名	千木良 礼子
編集機関	福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館
所在地	〒910-2152 福井県福井市安波賀町4-10 TEL.0776-41-2301
発行年月日	平成23年2月25日

調査地区	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
第130次調査	福井市城戸ノ内町 字門ノ内	18210	史-31	35°59' 44"	136°17' 34"	090422 } 101216	約2,500㎡	環境整備に伴う事前調査
第131次調査	福井市城戸ノ内町 14-2	18210	史-31			090422 } 090516	約42㎡	現状変更に伴う事前調査

調査地区	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
第130次調査	屋敷	室町・戦国時代 (15・16世紀)	土塁1、竊垣1、石垣3、 透1、溝26、建物3、 石積施設3、炉跡1、 石敷1、竹製排水管1	越前焼、土師質土器、 瀬戸・美濃焼、 中国製陶磁器、 石製品、木製品、 ガラス	ガラス工房跡を検出
第131次調査		室町・戦国時代 (15・16世紀)	井戸、石敷	越前焼、土師質土器、 瀬戸・美濃焼	

特別史跡

一乘谷朝倉氏遺跡 40

平成21年度発掘調査・環境整備事業概報

発行年月日 平成23年2月25日

編集・発行 福井県立一乘谷朝倉氏遺跡資料館◎

印刷 兎玉印刷株式会社